

## 会長の任期を終えて

水木純一郎 (関西学院大学)

これまでの15人の錚々たる学会長の顔ぶれを見て、放射光学会長は誰かがやってくれるものと思っていましたので、2011年夏に第16代会長に選ばれたことを知ったときは、「まさか」と思うと同時に、「これは大変なことになってしまった。」というのが本音でした。大変なことの理由の一つは、私的なことではありますが2011年4月に日本原子力研究開発機構から関西学院大学に転職したばかりで、しかも2015年開設の新学科立ち上げを命じられていたこと、もう一つは日本学術会議が策定するマスタープランの大幅な改定が予定されていたこと、があったからです。学会長としての任をこなすためには幹事の人選が重要です。人選にあたって考えたことは、若手・中堅でまだ幹事経験のない有能な方、将来学会をリードする一人になってくれるだろう女性に加わってもらうことでした。これらを見事に満足する方たちが幹事を引き受けてくれたことが大きな力となりました。途中で渉外幹事が日本を脱出？されるという予想外なことがありましたが、運が強い私はすぐに素晴らしい代わりの渉外幹事に恵まれました。このような幹事を人選した自分を褒めていいと思っています。評議員会を開催しない単独で開催する幹事会は、いつも関学の梅田キャンパスで行い、会終了後は、もちろん事務局の佐藤さんも加わって梅田のとある焼き鳥屋で学会の将来？や人生を語り合ったこともユニークで楽しい幹事会でした。

まず皆様にお詫びしなければいけないことがあります。お約束したにも関わらず守れなかったことがあります。それは、日本中性子科学、日本中間子科学会と合同で研究会、ワークショップを開催し、量子ビームプラットフォーム形成の足掛かりを創ることを公約したのですが、実現しなかったことです。2012年から始まった文科省の事業である元素戦略の一つのテーマとして各量子ビームが主催する研究会を計画したのですが実行できませんでした。言い訳になりますが、似たような研究会がすでいくつか計画、開催されており関係者の負担が大きくなることを懸念いたしました。これを計画するとき、このような試みを重ねていくことによって将来、上記2つの学会と日本放射光学会が「発展的解散」し、「日本量子ビーム科学会」として新たに出発するのも時代の流れかなと思いました。次期会長に頑張ってもらいましょう？！

SPring-8やKEK・PFでは、これまでの利用者懇談会が、それぞれSPRUC、PF-UAとして生まれ変わり、それらの会員数は放射光学会員数の10倍にもなる大きな組織となり活動を始めています。それぞれが研究成果発表を

中心としたシンポジウムを開催しています。さらにそれぞれの施設がそれぞれの将来計画を策定するに当たり、日本全体の放射光の将来を議論する必要も出てきます。このように学会設立初期の時代からはずいぶん状況が変化してきていますので、学会に期待されることも徐々に変わってきているように思います。例えば、2009年の行政刷新事業仕分けでは当時の尾嶋会長がいち早く行動を起こしました。外に対して闘う学会とならなければいけないことを教えられました。

皆さんご存知のように、マスタープランに関しては、次期計画としては中型高輝度光源ということで学会員の意見をまとめることが出来ました。これには、現在、いわゆる東北放射光計画で中心になっておられる先生方、理研、KEKの放射光計画の中心となる先生方が腹を割って話し合ってくれたこと、さらには公開討論会での講師、それに参加していただいた学会員の皆さんが率直にご意見を述べていただいたことが大きな原動力になりました。有難うございました。感謝いたします。今後も放射光科学に関わる様々な問題に関して施設を越えて一つのものままとった答えを提示することは、学会に期待され求められることでしょう。日本学術会議の結論は来年の3月か4月に出されるようですが、その如何に関わらず中型高輝度光源実現のために今後も学会員皆さんのサポートが必要です。様々な場面で声高に必要性をアピールし、一致団結していきましょう。

私の学会長としての最後の仕事に、AOFSSR 2013がありました。第1回目が日本のつくばで開催され、今回は第7回目で再び日本がホスト国になり姫路で開催いたしました。本来、その準備に学会長は大変なはずなのですが、JASRIの事務局の皆さんの手慣れた素早い仕事さばきの賜物で、私はただただ彼らの言われるままに動いていればよかったです。今更ながらJASRIの皆さんの能力の高さに感心いたしました。有難うございました。

今は2年間の重責を終え、ほっとしています。これからは、心の余裕がなくしばらくできなかったテニスを再開し、若返りに挑戦しようと思います。

最後になりましたが、私を支えていただいた幹事の木村洋昭さん、松田巖さん、玉作賢治さん、唯美津木さん、若槻壮市さん、松原英一郎さん、学会事務局の西野さん、佐藤さん、本当に有難うございました。そして学会の様々な活動にご協力いただいた全学会員の皆様にもお礼を申し上げてこの拙文を終わることにいたします。

### 庶務幹事を終えて

木村洋昭 (高輝度光科学研究センター)

何事にも意外と卒が無いアリ派の前幹事の原田氏から庶務幹事を引継いでからもう2年、私のようなキリギリス派でもなんとか大過なく任期を終える事ができたのは、ひとえに会長や他の幹事の皆様、事務局の皆様のおかげと感謝しております。

さて、この一年の大きな仕事と言いますと学会 HP の刷新です。学会の HP ページは2004年に木村真一渉外幹事を中心に改定されましたが8年以上の時の経過は明らかで、「どこか昭和の匂いのする」(もちろん昭和に Web はない) というコメントを頂いた事がありました。今回は KEK の平木氏、理研の引間氏、JASRI の松下氏を中心にした Web 達者な委員の皆様のおかげで、お金をかけずに今風の HP を作ることができました。売りは各放射光施設のツイッタータイムラインとアフィリエイト広告です。各放射光施設が呟いたツイートは自動的に表示されます。また、学会のブルーボックスのバナー広告をクリックしてアマゾンのサイトに入って後で、新たにカートに入れた物品(なんでも)の購入金額の一部(現在は3%)が学会の収入になります。尚、事務局には何をいつ幾らで買ったかの情報はきませんが、誰が買ったかはわからないようになっています(4月—9月間の収入は3000円ほどでした)。皆様のご協力をお願いします。又、玉作編集幹事と相談して2年以上前の学会誌の公開を行いました。放射光関係のキーワードでググった(一般の検索サイトで検索をかけた)時には、学会誌のバックナンバーがかなり引かれるようになった事にお気づきになった方もおられると思います。さて入れ物はできたので、今後はやはりコンテンツの充実が必要です。学会誌の編集委員会のような Web 委員会をつくり魅力あるコンテンツにより閲覧数が更に増加すれば、学会誌が完全電子化されても学会 HP から広告収入が得られる道が開けると思います。

昨今、どこの学会でも話題になっている法人格取得問題に関して少し書きたいと思います。いろいろな学会が「社団法人になりました」とか「公益社団法人になりました」というアナウンスを聞く機会が多くなったかと思えます。これは新公益法人法への対応という事なのですが、この法律は、いろいろな法人の中で儲けているところから税金を取って政府の収入を増やそうという事と私は考えていま

す。現在日本放射光学会は法人格を取得しておらず、税法上は「人格なき社団等」という任意団体になっており、これは PTA や町内会と同じ扱いです。法人格を取得する事はそれなりのメリットもあるのですが、大幅な組織変更と定款変更作業がある事からまずは様子見で他の同じ規模の学会の動向を見ておりました。2012年10月に、日本学会議事務局により「新公益法人制度への移行状況などに関するアンケート」という調査が行われ、当学会では「当面新公益法人への移行予定無し」という主旨の解答を行いました。その後2013年3月にそのアンケートの調査結果が事務局から送られてきて、その結果の表紙に「学会の形態が法人として承認されない「任意団体」の場合、会費収入や機関誌や大会の事業費も課税の対象となる危険があり、最悪の場合は脱税行為と見なされる危険もあります」という脅しのような文章が書いてありました。さて、当学会は毎年会計監査を丸西税理士事務所をお願いしており、毎年顧問料として46万円を支払ってきました。これは他の学会ではあまりない支出項目で、このおかげで毎年会計監査委員になった会員が領収書のチェックを行ったりしないですんでいます。調べてみるとこの支出は学会発足時からずっとある事がわかりました。そこでこの税理士事務所にこの件を問い合わせたところ、「課税対象になるような規模の業務を行った場合は申告手続きを行うように助言するので問題ない」という回答を頂きました。ということで毎年の決算報告をきちんと行っていけば、突然メディア等で「放射光学会で脱税行為発覚！」と騒がれるような事は起こらない事がわかりました。この件は評議員会で報告され、当学会は当面法人格取得を行わないという事が決まりました。発足当時の幹事の皆様(初代会計幹事は菅先生でした)には先見の明があったという事になります。(尚、法人格を取得すると会計監査費用は毎年100万ぐらいになるようです)

最後にあらためて、このような貴重な機会を与えて頂きました水木会長や、サポートして頂いた他の幹事の皆様、つたない評議員会運営をいろいろとフォローして頂いた野村議長や評議員の皆様、影の庶務幹事である事務局の佐藤様に大変お世話になりました事を感謝いたします。

## 行事幹事を終えて

松田 巖 (東京大学物性研究所)

2012年10月より行事幹事として2年目の任期が始まってからもう1年が過ぎました。2012年度に実施した放射光学会の主要な行事は第26回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム (JSR13), 第5回若手研究会, 第5回放射光基礎講習会, 国際会議 AOFSSRR2013でした。

年会・合同シンポは名古屋大学の坂田・平田ホール及び-ES 総合館での開催で, 竹田美和実行委員長, 馬場嘉信実行副委員長, 加藤政博プログラム委員長のご尽力により, 601名の参加者を得て大成功裡に終えることができました。組織委員会, 実行委員会の皆様には厚く御礼申し上げます。放射光基礎講習会と若手研究会は, 若手研究者の育成と潜在的放射光ユーザーの掘り起こしを目的に2009年度から始まった行事で, それぞれ8月と9月に第5回として実施致しました。参加者は若手研究会では52名, 基礎講習会では64名と, いずれも盛況でした。最後に国際会議 AOFSSRR2013では, 今年度は日本の姫路での開催ということで現地の実行員として力を尽くさせていただきました。

基礎講習会としては, 今年度は「よくわかる放射光科学講座」というタイトルで東京大学にて開催され, 学生や若手研究者を中心に多くの会員の方々に参加していただきました。光源, ビームライン, 実験技術の基礎から最先端研究まで幅広く講義内容として取り上げ, 各講師の先生方には大変素晴らしいご講義をしていただきました。若手研究

会では応募提案の中から研究会案「パルス特性を用いた次世代物質科学研究の最前線」が採択されました。東京大学物性研究所で開催された研究会では参加者のほとんどが経験豊富な若手放射光ユーザーであり, 放射光サイエンスの新しい展開について活発に議論を交わしていました。若手研究会と放射光基礎講習会の開催については, 行事委員会の皆様に本当に頑張っていただきました。小嗣真人副委員長 (JASRI), 足立純一委員 (KEK), 松波雅治委員 (UVSOR), 宮本幸治委員 (廣大), 矢治光一郎委員 (東大), 今村真幸委員 (佐賀大学), 堀場弘司委員 (KEK), 松村大樹委員 (JAEA) には, この場を借りて御礼申し上げます。

さて, 年明け1月には第27回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム (JSR13) が広島は広島国際会議場で開催され, 私も組織委員長として頑張らせていただきます。まだまだ未熟な組織委員長を, 経験豊かな谷口雅樹実行委員長, 生天目博文実行副委員長, 乾雅祝プログラム委員長にご支援いただき, 順調に準備が進んでおります。会員の皆様におかれましては, 是非ともご参加いただき JSR14を盛り上げて頂きたい存じます。

最後になりましたが, この1年間の会員の皆様のご協力に感謝するとともに, 引き続き, ご指導, ご協力をお願い申し上げます。

## 編集幹事を終えて

玉作賢治 (理化学研究所)

編集幹事を終えるにあたって, 在任期間の2011年10月から2013年9月までの活動を御報告します。足立前編集幹事の時に学会収支を改善するため, 学会誌を2012年1月号より2色化し, その1年後に完全電子化することが決定されました。これらを実施するには多くの作業が必要だったので, 編集委員会内で複数のWGを立ち上げました。まず, 少人数のWG内で集中的に討論し, その結果を編集委員会で議論しました。2色化に関しては大きな問題も無く, 若干遅れましたが, 無事2012年5月号に行え

ました。

2色化と並行して, 電子版の議論を進めました。電子書籍には幾つかのフォーマットがあり, タブレット端末と相性の良いものもありましたが, 将来のサポートや段組の可否を考慮して, PDFを選択しました。また, 号の形を残すこととしました。こういった形態に関する議論は順調に進みました。一方で, 唯会計幹事より詳細な会計報告を頂き, 冊子体と電子版に関連する経費と収入を精査した所, 単に電子化すると却って収支が悪化することが判明しまし

た。別刷や広告収入がなくなり、組版費は電子化されてもこれまで同様かかるためです。また、電子版を掲載する学会 HP が学会費に見合わない、あるいは、紙面広告に代わる web 広告を掲示するにふさわしくないという問題点も挙げられました。そこで編集委員会としては、まず学会 HP を更新すべきであるという結論に達しました。

幹事会での議論の結果、松原渉外幹事が招集した渉外委員会、木村庶務幹事、編集委員会の電子化 WG で HP の刷新を行いました。この時に、2011年以前の記事を全て公開しました。古い記事には OCR にて文字を埋め込みましたので、内容も含めてネットの検索にかかるようになりました。これによって放射光学会誌の記事が、放射光に関係する様々な活動に貢献するものと期待します。

残念ながら、HP の更新を終えた所でほぼ任期が終了してしまい、完全電子化は達成できませんでした。この点はお詫び致します。しかし、2年間の議論を通じて、学会員であることのメリットをどう捉えるか？ 学会誌・講習会・広告といったものの収支をどうバランスさせるか？ と

いった議論をもう少し深めていかないと、完全電子化は困難であると感じました。

さて、2013年3月には長らく絶版だった「放射光ビームライン技術入門」を増補版として出版できました。増補部を執筆して頂いた先生方、および、広告を載せて頂いた賛助会員の皆様に御礼を申し上げます。

学会誌の紙面づくりでは、1冊にまとまっているという冊子体の長所を活かすべく、毎号テーマを決めて関連する記事を複数集めました。各号のテーマに関して多角的な情報を得られる構成にできたと思います。また、会議報告を充実させるように心がけました。このように学術記事では幾つか工夫を試みましたが、一方で、会員間のコミュニケーションの場として十分に役割を果たせなかった点は悔やまれます。

最後に、思いつきのような提案にいつも笑顔で前向きにに応じて下さった水木会長を始めとする幹事の皆様、編集委員の皆様、また、事務局の佐藤亜己奈女史に深く感謝致します。

---

## 渉外幹事を終えて

松原英一郎（京都大学）

前任の渉外幹事でいらした若槻壮市先生（当時 KEK、現在 SLAC、スタンフォード大学）の早期退任に伴い、水木会長からの依頼で約1年間渉外幹事を勤めさせていただきました。学会にとって対外的な対応を任される重要な役割を、放射光学会に不案内な私のような者に依頼されたことは、私にとりましてはたいへん光栄なことでありましたが、水木会長の無謀ともいえる決断であったと思っております。渉外幹事の任期中は、どのように本学会にお役に立てるのかを考え、学会および学会員の皆様にご迷惑がかからないようにと、たいへん不安な一年でありました。

この渉外幹事を引き受けさせていただいたのは、京大小久見教授がプロジェクトリーダーである NEDO「革新型蓄電池先端科学基礎研究事業」、通称 RISING プロジェクトの関係で、スプリング8に新たなビームライン BL-28XU を建設し、専用ビームラインとしての研究活動を始めて、放射光との関わりが最近急速に増し、放射光コミュニティーを代表する放射光学会に、何かお役に立てればと感じたからであります。

今回の渉外幹事の業務の遂行にあたっては、水木会長、玉作編集幹事、木村庶務幹事、松田巖行事幹事、唯会計幹事から教わりながら、事務局の佐藤さんにはご迷惑をかけながらこの一年の業務をこなして参りましたが、学会の皆様にとって決して満足のいく渉外幹事ではなかったと思いますが、その点をご容赦いただきたいと思っております。一年という期間で決して十分なことはできませんでしたが、若槻先生から引き継ぎました学会誌の電子化に伴う学会ホームページの改訂だけは、木村庶務幹事を中心に多くの方々の力をお借りして、何とか形にすることができました。今後さらに使い易くするための改良が加えられ、学会の皆様にとりましてより見やすく使い易い、親しみの湧くホームページになっていくものと期待しております。

一年という短い期間ではございましたが、放射光学会に微力ながら貢献する機会を与えていただき、寛容な目で見守っていただいた水木会長をはじめ委員、幹事、評議員、そして学会員の皆様には心より感謝いたしております。今後、放射光学会がさらに発展することを祈っております。

---

## 会計幹事を終えて

唯美津木（名古屋大学物質科学国際研究センター）

平成23年10月1日より、2年間放射光学会の会計幹事を拝命致しました。水木現会長より電話を頂き、学会の会計幹事を打診された際は、学会のこともほとんど理解していなかった中でそんな大役が務まるだろうかと不安になりましたが、学会の先生方やワーズスタッフの方々に助けて頂き、2年間の御役目を果たすことができました。特に、ワーズの佐藤さんは、この1年、全てを取り仕切って頂き、大変助かりました。改めて御礼申し上げます。

最初の1年は、会計システムがきちんとしておらず、様々なトラブルがありました。会費未払いの問題、広告収入の減少、学会資産の扱い、会議費の増大など、解決すべ

き点が何かを洗い出すことから始めました。また、会計上、修正したほうが良い点も見つかり、皆さんに協力して頂いて、問題点を洗い出しました。このシステム変更に伴って、この年は大きく赤字の決算になりましたが、平成25年度分は無事黒字決算で終えることができました。特に、平成25年度は会議に参加される先生方の多大なるご協力で、膨れ上がっていた会議費を大幅に削減することができました。厳しい財政状況の中、身を削ってご協力頂きました先生方に改めて御礼申し上げます。

2年間、本当にどうもありがとうございました。